行する理論の分野の發展にあるとして、地味な基礎研究に專心し、鋭い見通を暗示しつゝ適正規模の問題にこと寄せながら、農業經營の類型を抽出し實證解明せられた貴い學問的態度と業績をうけつぎ、更に發展させることこそ私たちの道であろう。

至らぬ感想を羅列して、著者の本意に滿たぬところ、或は反したところがあろうと思う。著者の靈に對して寛恕あらんことをおわびし、又本書の理解に對して教示を與えられた高尾一彦氏等に深く感謝する。

（日本評論社A5・五二九頁定價五五〇圓　昭和二四年九月二〇日發行）—宮川滿—

酉水孜郎著

「日本の農業——その經濟地理學的研究」

經濟地理學の一部門としての農業地理一般に關する研究は農業區域の設定を試みたエンゲルブレヒトやウイットレッシイ、熱帶の栽植農業を研究したレオ・ヴァイベルさらにふるく「孤立國」を想定したチウネンの法則等が一部に紹介せられた以外に獨立した農業に關する地理書は殆んど見られない狀態であつた。けだし農業に關する地理といえば、その取扱うところ極めて廣汎であり、農業一般はもとより、自然的基礎たる地形、地質、土壤や肥料、氣候、農業經濟、農業經營、農業人口、農村社會等すべてに通じ、土壤は土壤として、農業經濟は農業經濟としての研究が既に獨立した一部門を構成し實に既に別々に發表されてきたからである。しかし地理學がもし地表におけるこれら自然人文兩樣の地域的特質を取扱う特殊な綜合科學だとすれば農業地域こそ、これら二つの要素が混然と織りなされたものであり、農業地理學の研究は最も普遍的な地理學の課題を提供しているといわねばならない。殊に狹い國土を蔽う農業の問題は極めて主要な眼前の問題でなければならないにも拘らず、農業を經濟地理的に概觀した書物が從來あまり出版されなかつたのは一にかゝつてその領域が廣汎な爲に觀點の置き場所に困るといつた問題にあつたともいゝうるのではなかろうか。著者の立場はこの點からいえばその豐富にして多方面な研究の中にもなお東大學派ともいうべき景觀論的立場に基礎をおいていることが注目されるのである。本書の主要構成は第二章日本農業の基本的條件、第三章耕地、第四章水田農業、第五章畑農業、第六章都市と農業、第七章山地農業の六つの章からなつている。

その敍述の方法はまず第二章で日本農業の把握のし方を序論的に概觀し、三章以下で地域を主とした農業の特殊性を要約し、沖積低地、台地、山地といつた自然的基礎の上にくりひろげられた日本農業の特質を作物、作付面積、反當收穫量その他あらゆる統計から明らかにしている。ことに現下開拓局等で問題にされている山地農業にあつては、これを大きく高冷地域と火山地域に二大別し、山地氣候や土壤による作物限界の將來性、さらに東北、中部、四國、九州山地にみる燒畑、出作り、有畜農業一般、さては北海道の酪農經營に至るまで現行日本各地の具體的事實を例證し乍ら敍述し、また第六章の著者の平素の研究を要

約した「都市と農業」の項にあつては近郊農業の特質これと遠郊農業との差違、作物の特質を明らかにし、後者についてはとくに移動の最も大きい甘藍と玉葱について、また特殊な久能山蔵の苺作り、東海地方の莢豌豆の栽培、出荷の狀況等を説明している。同様に水田農業の考察に當つては氣候的條件を重んずべきこと、ことに東北日本の冷害と西南日本の旱害の問題が、災害年度における具體的な米の減收率の統計によつて示めされる地域的類型を把握せしめている。その敍述の方法はあくまで科學的で巧もあぶなさがない。殊に山地農業の項にあつてはピーテイのアルプスその他ヨーロッパ山地の農業地理に關する研究を參照している點が注目せられるのである。緒論的な意味をもつ第二章にあつては日本農業における自然的條件、ことに地形と土壤、氣候と災害が如何なる意味をもつかを要約した後、社會的經濟的條件としての農業人口、農家經營規模等の問題を取上げている。要は農村における工業化の進展と共に專業農家が減少して賃勞働兼業農家が增加したこと、さらに零細規模の小作農家の增加に對する土地人口の餘力等を論じ、かゝる狹小な耕地經營では家畜の保有、農業勞力の雇傭、耕耘機其他による作業の能率を促進さす諸機械の必要性を減殺すること、結局「我々は今この問題を解決するために人口の收容力に於て非常に大きい工業の振興を期せねばならない。これによつて多くの人口を都市に收容しなければならないが、この策を以てしても農業の經營規模を改善し適正たらしむることは非常に困難で……」と要約している。さらにこの章では國土計畫と農業なる節をもつて結びとしているがそこでは「農業の立地條件としては既述のごとく社會的經濟的なものと、自然的なものとに大別される。社會的經濟的なものゝ中には國際關係、土地制度、經營規模或いは資材、資金計畫、輸送及び市場關係等々がある。又自然的條件としては地形、土壤、氣象條件と耕地の立地及び作物栽培との關係をどうするか等が重要である。これらの一つ一つを相互の關聯を調整し乍ら條件に適應し、或いは條件を整備して、安定した立地條件を求めて行くのが國土計畫を策定する上の重要課題である」とのべ、「但し我が國の全般的實情から判斷すると……むしろ時間をかけて良い農村を作ることに心掛けるべきでないかと思はれる」といつたあいまいな文句で結んでいる。

著者は理論家ではなく着實なフイルドにたつて過去永い間研究を進めて來た地理學者であり、既に昭和十二年にでた青鹿四郎氏の「農業經濟地理」と共に本書には他の書物にはみられない地域研究を主にした地味な資料統計の取扱い方が注意される。しかし本書を一讀して感じることは著者の立場があくまで景觀的、モルフオルギツシュなることである。たとえば「近郊農業の性格」の項で例を取ると栽培景を重んじ「各季節に就ての色彩の變化…」「四季に於ける景觀の繰返し」といつた事項が不當にも多くのべられ、これらの景觀の繰返しを重んじるの餘り、この繰返しを演ぜしめる社會的背景の問題が讀者には强く迫かないおそれがあるように考えられる。同樣に第二章の社會經濟的條件でも何故人口が農業と

關聯するかといつた根本的な問題、資本主義社會の特質に關する問題等が案外簡單に片付けられ、地域の現象の忠實なる記載、地人的把握に終りすぎているのではないかこの點方法論的立場を主として考えれば、さきの歴史的な立場を比較的重視した青鹿氏の著書よりもはるかに拔き出たとはいゝえないようにも考えられる。しかし地理學徒にとつて先ず何よりも必要なことは着實なる地域調査であるとするならば、この廣汎な問題を包括する日本の農業を地理學的に研究要約したものとしてこの地味な研究は充分推賞さるべき學究の書であるといわねばならない。終戰後いたずらにかけ聲のみ大きく、努力のすくない書物が續出する折から本書のもつ價値は極めて大であるといわねばならない。（昭和二十四年古今書院發行、定價六五〇圓）

—（藤岡謙二郎）—

細野重雄著

アメリカ農業の機械化

（農業綜合研究所研究叢書第六號）

東畑精一博士を所長として、戰後、農林省に新に開設された農業綜合研究所は、國内或は世界の農業全般に關するさまざまの問題をとり上げ、その研究業績を機關誌「農業綜合研究」及び「研究叢書」に公表したえず活潑な活動を續けて來ている。こゝに紹介した著書も、所員細野重雄氏によつて「研究叢書」の一つとして刊行されたものであり、本文一八二頁と、別に多くの統計資料が卷末に附加されている。近時わが國に於ては農業の生産力を高めるために農業機械化の問題が盛んにとなえられ、現に一部の農村には農業機械の若干普及化したところもみられる。しかしアメリカの如き高度に資本集約的な經營の行われる農業と、わが國の如き極度に勞働集約的な零細小農經營の行われる農業との間には、直接比較し難い多くのものを持つているため、アメリカの機械化農業に多く學ぶところはあるにしても、その儘わが國にそれを移植しがたいことはもちろんのことである。從つてそれには、アメリカの機械化農業に就ての多くの角度から研究が望まれるのであつて、單に技術的な面からばかりでなく、機械化を通じて示されているアメリカ農業の本質を、國民經濟的關聯の下に於て把握することが必要である。然るにこの方面に就ての研究は、これまでわが國に於ては殆どかえりみられなかつた有樣であつたが、こゝに細野氏のすぐれた勞作に接し、その全貌をうかゞい得るに至つたことはまことによろこばしいことゝ云わねばならない。

細野氏はアメリカ農業の最も主要な特徴をもつてその莫大な生産力にありとし、生産力の發達は農業機械化の進展を意味する。それ故に「農業機械化の過程を檢討しこれが農業經營を如何に變貌せしめ、生産力を如何に昂揚せしめ、農業の生産構造を如何に變革せしめたかということを把握することは、アメリカ農業の生産力の最も重要なる契機を分析することゝなる」との企